

キタキツネのキキ

10

作 なかむら よしひろ

ほそい山道には10センチほどの雪がつもっていました。おなかがいっぱいなら雪の上を走り回るのも楽しい遊びかもしれません。今はただ冷たいだけです。吹きだまりに足をとられると、おなかに雪がべったり付いてますます寒くなります。キキは雪のつもっていないカラマツの根っこに木の実が落ちていないかと探しました。でも、そんなところの木の実はリスたちがとつくとくに集って帰って一つも残っていませんでした。キキはもう少し山の上の方に向かって歩きました。そのとき、「おい、キキじゃないのか」という声がありました。えさを探すのに夢中でずっと下を向いたままだったので、まわりに気をくばるのを忘れていたのです。いきなり声を掛けられキキは飛び上がるほどおどろきました。すると目の前に大きなキツネがいて

じつとキキを見ています。

「おれだよ、トトだよ」

たしかに声はトトでした。でも体は前に会ったときよりもずっと大きくなっていました。それはトトが立派な冬毛におおわれていたからそう見えたのです。

しっばだけでもキキの体ほどの大きさがありました。これなら少々の雪でも何ともないでしょう。それに比べてキキの毛の貧弱なこと。ほとんど食べていないので冬毛になれないのです。トトの毛皮は雪をはじいてふさふさしていました。でもあぶらのないキキの毛は雪をはじくことができないのでぬれてぐっしょりです。しっばときたら秋に毛が抜け落ちたまま汚いひものようなのです。

「何だ、トトか、おどろかささないでよ」とキキはよわよわしい声で言いました。

「どうしたんだ、おまえ、そんなにやせてしまつて」

キキはお母さんとニニが車にひかれて死んでしまったこと、その後はずっと自分だけで生きてきたこと。

食べものは観光客からもらっていたけど、どういうわけか観光客が来なくなつたのでここ数日は何も食べていないことをトトに話しました。お母さんとニニの話のところでは思わ

ず涙が出てきました。じつとキキの話を聞いていたトトは、

「そうか、おまえも苦労したんだなあ」と同情してくれましたが、続けてきびしい顔で「だから俺があのとキ人間に食べものをもらつちゃだめだと言つただろう」

そうです、確かにあのときそう言われました。狩りの練習のためにトトのところにくるようにも言われたのですが、キキは狩りの苦労までしてまずいエソヤチネズミなんか食べたくなふと思つて行かなかつたのです。だつてあのころはだまつて道に座つているだけで人間が食べものをくれたのですから。

「おまえ、このままじゃ死んでしまつぞ。うちへ来い、何が食べさせてやるから。じつはな、おれ、このまえけつこんしてよめさんをもらつたんだ。うちのかみさんの料理したネズミはうまいぞ」トトはネズミの味を思い浮かべたのでしようか、舌なめずりしながら言いました。

キキは前にトトのおうちで食べさせてもらったなまぐさいネズミの味を思い出しました。あのときは食べることができなくてはき出してしまったのですが今はなんでも食べられそうです。それくらいキキはおな

かがべこべこにすいていたのです。キキはトトのあとをよるよるとついて行きました。

トトはおうちを前の場所よりちょっと高いところにひっこししていました。

「おい、かえつたぞ」

トトが巢の入り口で大きな声を出す

と中から「は〜い」というきれいな声が聞こえました。そしてすぐに巢から出てきたキツネの顔を見てキキはおもわず身をかくしました。なんと、前にちよつと声を掛けただけで行つてしまつたあめギツネがトトのおよめさんになっていたのです。

(7月号へつづく)

